



Title	武者小路実篤における 生長 の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	吉本, 弥生
Citation	北海道大学. 博士(文学) 乙第7165号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/87169">http://hdl.handle.net/2115/87169</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yayoi_Yoshimoto_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 吉本弥生

## 学位論文題名

### 武者小路実篤における〈生長〉の研究

#### ・本論文の観点と方法

本論文は、『白樺』派の代表的な作家であり、大正時代から戦後に至るまで活躍した武者小路実篤の文学を、小説・戯曲・伝記・評論など多数の作品を対象として、特に思想的および芸術論的な観点から論じたものである。その特長は、人格的・精神的な自我の〈生長〉を焦点として、これまでは別個に論じられてきた芸術（文芸・美術）、宗教（キリスト教・仏教）、それに思想（儒学・哲学・美学）の三分野を、それらの緊密な相関関係において検討を加えたことにある。

武者小路の作品には、登場人物の精神的な〈生長〉を主題とするものが多いことはこれまでもよく知られていたが、特に『論語』を中心として孔子の思想や孔子の登場するもの、あるいは仏典に依拠したり釈迦が登場したりするものについては、十分な追究が行われてこなかった。本論文は、武者小路の作品と思想の基盤として、儒学と仏教、特に儒学の存在について注目し、深い考察を加えている。また、武者小路が西洋および日本の美術に造詣の深かったことも既知の事柄であるが、例えば、『白樺』派が目指していたロダンに対して、武者小路はイエスや釈迦に対するのと同じような崇拝を示していた。本論文はこのように、芸術と宗教と思想とは、武者小路にあっては渾然一体化しており、すべては、自我の〈生長〉を求める姿勢によって一貫していたとする観点から論じられる。

その観点から、本論文は従来個別に論じられてきた、トルストイの非暴力主義や農業重視の思想の影響、マーテルリンクによる生の肯定の受容、現実的な実践としての「新しき村」の共同体創出の事業などを、精神の〈生長〉を焦点として、相互に関連するものとして解明する。本論文は、この総合的な論述の方法により、武者小路の思想的営為における連続性と変化とを根底的に解明することを試みた。その思想の根幹を、人間の心と人格を向上させ、内面を〈生長〉させ続けようとする〈生長主義〉に置き、大正期から戦後に至るまで、変容をはらみながらも、基本的に一貫したものと認める。ただし、戦中期における戦争協力的な作品については、今後解明すべき大きな課題であるとした。

本論文は、武者小路実篤の作品に表現された〈生長〉を焦点として、これらの諸側面について横断的に総体的な再検討を行うことにより、日本近代におけるそれらの思潮に新たな知見を加え、そこにおける武者小路の位置を再定位することを目的としたものである。

#### ・本論文の内容

本論文は、序論・結論の外、第一部・第二部の作品論、第三部の思想論の三部から成る。序論では本論文の観点と方法を具体的に述べた。

第一部は、作品における暴力への抵抗と精神的向上の思想を焦点とし、第一章では、初期作品から諸宗教思想と〈生長〉のあり方の関連を明らかにした。『荒野』、「わしも知らない」、「人間万歳」などに表現された武者小路実篤の宗教思想は、キリスト教や仏教、儒学と融合しながら、聖人の希求を目標とする人格向上をそれぞれの形で表現していた。特に、武者小路実篤の宗教思想に儒学の要素が認められる点は、これまでほとんど問題視されてこなかった。彼が幼い頃から受けてきた『論語』の影響と、後年の『論語私感』の内容が顧みられなかったためである。第二章では、「桃色の室」に見られる社会観と精神的自由の結びつきを考察することで、暴力への抵抗、独立の精神との関わりに触れ、武者小路実篤の精神的〈生長〉の内実を検討した。第三章では、「その妹」を分析し、武者小路が目指す到達点の過程に

ある物語とし、滑稽さや甘えの構図に、武者小路自身のセルフ・パロディ性などが見られるとする。第四章では、「友情」における精神的〈生長〉を果たした友人と果たしていない主人公の差を検討し、その〈生長〉の過程によって、訪れる結果が異なることを確認した。

第二部では、武者小路の伝記小説における人物像を分析した。武者小路はほぼ生涯に亘って伝記小説を執筆したが、その研究はほとんど進んでいない。第五章では、「二宮尊徳」を取り上げ、〈生長〉を実践した偉人として、尊徳の農業本位とトルストイの思想、それに教育の重要性が描かれることを検討した。第六章では、『大石良雄』と『井原西鶴』を対象として、近世の精神としての『論語』を重視する大石の姿と滑稽を重視する西鶴の姿を読み取り、大石像には、仇討ちという名の復讐に対する疑問を看取り、当時の世相への反発が読み取れるとした。第七章では、伝記小説における聖人像を検討し、『孔子』『釈迦』『耶穌』において、超人的な奇跡を起こす神ではなく、現実的な人間として神に近づこうとする聖人像を認め、また『トルストイ』にもキリスト教を実践する人物としての聖人像を見出したとする。これら武者小路の伝記小説は、総じて、作中人物における人格向上としての〈生長〉を見出す態度があるとし、それを武者小路が継続的な伝記小説を執筆した要因として理解する。

第三部では、武者小路と同時代の思想との関係が検証される。第八章では、武者小路の思想を焦点に〈生長〉の過程を考察した。初期の「修養の根本要件」において、「自己」の内に「大我」と「小我」の存在があり、トルストイや儒学、仏教など東西の宗教の影響や「自我」を神としてとらえていたことを明らかにし、最初期から多様な思想を受け入れ、〈生長主義〉の基礎としたことを論じた。第九章では、武者小路実篤の人格向上の特徴と変遷を明らかにするため、トルストイの宗教観と非暴力主義の関係について論じ、同時代に流布したラスキンとモリスについても検討した。武者小路の思想が内村鑑三やトルストイと同じく人格向上による非暴力的な社会変革の思想であり、トルストイから最も強く受けた影響は、このような意味での非暴力主義的宗教観であるとした。第一〇章では、日本における最初期のリップス受容に焦点を当て、伊藤尚のリップス論を元に「同情」と「隣人愛」から阿部次郎と武者小路の宗教・社会観を考察した。神秘主義として受容されたショーペンハウアーと、リップスの感情移入美学が入り混じった形で受け入れられ、阿部と武者小路の人格向上としての〈生長〉の延長線上に国家・共同体を認める思想が形成されたとする。第十一章では、武者小路の芸術家への憧憬が人格向上という〈生長〉の方法と見なし、ロダン崇拜に見る彼の芸術観を「絵画の約束」論争から考察し、ゴッホや象徴主義、感情移入美学との関連において、自我の〈生長〉が芸術へ昇華されていく過程を確認した。第十二章では、武者小路における画家・芸術家への憧憬をさらに検討し、それらが「自己」の「個性」を追求することによって、「他人」との共鳴を果たす重要な存在として認識されていたことを解明する。第十三章では、多様な宗教観の根源が『論語』にあるととらえ、「調和」の精神の発展について、『論語私感』を対象として論じた。武者小路の『論語』受容がトルストイの思想とも融合し、人類全体の「調和」へと発展していったものと認めた。

結論では、本論文の論旨を集約し、武者小路を日本近代文学史上に位置づけ直した。それとともに、「新しき村」を提唱した目的が、労働者の人格や精神を侵害し、精神的自由の意志を害する者からの救済であり、その方法が労働者自身を主に芸術によって〈生長〉せしめ、自力で養う活動を実践することと認め、思想と現実的实践との繋がりをも論じて本論文をまとめた。